

東都大学図書館通信(深谷キャンパス)

読書で生涯をすごし、さまざまな本から知恵をくみとった人は、
旅行案内書をいく冊も読んで、ある土地に精通した人のようなものである。

～ ショウベンハウエル(ドイツの哲学者)の言葉です～

1. 日本最初の女医・荻野吟子



(写真提供:熊谷市)

日本最初の公認女医として知られる荻野吟子氏。埼玉県熊谷市にとても縁のある方で、1851年に現在の熊谷市俵瀬に生を受けました。吟子は(当時の女性には珍しく)幼少期から学問に励み、17歳になる年には近隣の名家へ嫁ぎましたが、幸せな日々もつかの間、不慮の病に罹りやむなく離縁することになります。婦人科治療のために入院した吟子。当時は人前で肌を見せることなど考えられない時代でしたが、恥ずかしさと苦しさに耐えながら男性医師の診察を

受けました。この経験から吟子は女性医師の必要性を痛感し、「同じように苦しい思いをしている女性たちを救いたい」と医師になる決意を固めます。しかし、女性というだけで医学校への入学が認められなかったり、医術開業試験の願書が受理されなかったりと、女医への道は険しく、障壁は星の数ほどありました。そんな極めて困難な状況の中でも、吟子は不屈の精神で果敢に挑戦し続け、医学校への入学そして医術開業試験の受験を叶えます。医学校時代には男子学生からの嫌がらせが多く、毎日男装して通学したり、「とにかく成績で1番を取る!」と寝る間も惜しんで勉強したそうです。様々な困難を乗り越え、1885年にはついに医師免許を取得します。吟子が医師を目指してから実に15年目のことでした。医師免許取得後は、現在の東京都文京区に「産婦人科 荻野医院」を開業し、多くの女性たちを救ったそうです。

では、荻野吟子氏に関するトリビアをひとつご紹介しましょう。「荻野吟子」という名前の小惑星があることを皆さんはご存じですか? 火星と木星の間の小惑星帯を回る直径10km程度の天体で、「荻野吟子」のほかに「直実」「熊谷」「星川」「ムサシトミヨ」という熊谷市にゆかりのある名前の小惑星があるそうですよ。



花埋み(はなうずみ)
(渡辺淳一著/新潮社)

◆ 渋沢栄一翁が愛した言葉 ◆

たとえその事業が微々たるものであろうと
自分の利益は小額であるとしても
国家必要の事業を合理的に経営すれば
心は常に楽しんで事に任じられる

【『渋沢栄一伝記資料』青淵百話】



「まずは楽しむ気持ちが大切。常に楽しもう!」という格言です。自分のしていることがどんなに小さくても誰かの役に立っていると信じれば、自ずと楽しくなるでしょう。万事を明るいきもちで努め、充足した日々を過ごしましょう。

※格言は『渋沢栄一 100の訓言』渋澤健・著/日本経済新聞出版社 p.46より転載

2. 皆さん、チーズは好きですか?

世界中の人々が愛してやまないチーズ。その歴史は古く、野生動物の家畜化が始まった紀元前9000年頃のメソポタミア(西アジア)が発祥と伝えられています。最初に作られたチーズについては諸説ありますが、一番有名なのは次の逸話です。「アラビアの商人がラクダに乗って砂漠を横断する際、長旅に備えて、羊の胃袋で作った水筒に乳を入れていった。一日の旅を終えて喉を潤そうとすると、水筒の中は透明な液体と白いかたまりに分かれていた。恐る恐るその白いかたまりを食べてみると、何とも言えない美味しさだった」。チーズはこうしてできた偶然の産物なのです。家畜文化の発展と共にチーズは世界各地へ広まり、その土地土地に合ったチーズが誕生したそうです。今では世界中に1000種類を超えるチーズがあるとされています(チーズは大別すると「ナチュラルチーズ」と「プロセスチーズ」に分けられます。前者は自然の乳酸菌が生きているチーズ、後者はナチュラルチーズを加熱溶解して様々な形に固めたチーズです)。

チーズには体の基礎となる良質なたんぱく質やカルシウムが豊富に含まれており、骨粗鬆症や高血圧、虫歯の予防のほか様々な効果が期待できます。自分好みの美味しいチーズを見つけてみてはいかがでしょうか。



世界のチーズ図鑑
(NPO法人チヂコソコソコ監修/絶叫マガジン)

3. ゆるっと日本史

「歴史は人間のズルさ、しょぼさ、ゆるさでできている」—そうおっしゃるのは日本中世史の大家・本郷和人先生です。高校までの日本史は、「大学受験のための教科」として覚えることが多く、苦手意識をもつ方も多いかもしれません。歴史ってなんとなく「遠くのこと」というか、「教科書上のこと」というか、身近に感じることが少ないですよね。そんな風に感じていらっしゃる方にお勧めしたいのが『東大脱力講義 ゆるい日本史』です。主に中世史(鎌倉～室町～戦国時代)について書かれた本で、本郷先生と漫画家のカレー沢薫さんがゆる～く面白くまとめてくださっています。例えば、源頼朝のことを「武にも文にも秀でた北条政子のスパダリ」と紹介していたり(p.24)、源義経の恋人・静御前が義経を恋しがる舞いを舞った様子を「L・O・V・E・Yoshi-tsuné」と表現したり(p.29)、言葉のチョイスがとにかく絶妙で面白いです(日本中世は「ボコったもん勝ち」の時代(p.6)なんていう表現もありますが…)。カレー沢さんの漫画はゆるすぎて笑ってしまいますが、その実、的を得ていてすごくわかりやすい!歴史が苦手な方にこそ読んで欲しい1冊なんです。

本書を読むと歴史に血が通い、歴史上の人物が身近に感じられます。現在とは異なる価値観に驚くこともあります。時代背景を知ると、様々な出来事の因果関係もわかります。



東大脱力講義 ゆるい日本史
鎌倉・室町・戦国時代
(本郷和人監修/カレー沢薫まんが/小学館)

『星の王子さま』サン=テグジュペリ

高齢者看護学領域 柿沼秀子



星の王子さま

(サン=テグジュペリ著、河野万里子訳/新潮文庫)

この本は、遠い星から地球にやって来た王子さまと、砂漠で飛行機が故障した「私」が出会い、別れるまでの話である。王子さまは、いろいろな星を旅して、出会った不思議な大人たちの話を「私」にする。しかし、それは、ごくありきたりな大人の話である。

私が、この本を初めて読んだのは、中学1年生の時だった。星の王子さまは、有名な本だから、一度は読んでみよう、という気持ちで、図書館で借りて、読んでみた。結局、何が素晴らしいのか、全く分からなかった。“大人は、子どもの頃の気持ちを忘れてしまうのだ”というテーマがあるのは、分かるのだが、面白みがなかった。高校生になって、また、読んでみた。やっぱり、分からなかった。看護学生になって、読んでみた。やっぱり、分からなかった。何度も読んでいっているうちに、話の冒頭にある、ソウを飲み込んだウツバミの絵が、頭から離れなくなった。気位の高いバラの存在が、気になって仕方なくなった。私は、とうとう本を買った。それから、何回か読んだが、やはり何が面白いのか、分からなかった。ずっと時間が経って、子どもが産まれて、子どもたちが小学1年生の時に、読み聞かせた。すると、子どもたちが、声をあげて、グラグラ笑った。私は、やっとこの本の面白さが分かった。大人が当たり前だと考えたり、信じたりして、形に囚われていることが、子どもにとっては、グラグラ笑うほど、可笑しなことなのか、と。確かに、そうかもしれない。大人は、本当は、つまらない、どうでもいいことに、囚われて、疲れてしまっているのかもしれない。

私も何かに囚われている、可笑しな大人かもしれない。目に見えないものを、形のないものを、大切に言いながら、どこかで、不確かだと考えているのかもしれない。それでも、心は自由でありたいものだ。

学生の皆さんは、どうだろう。子どもの頃のように、心は自由だろうか。星空を見上げて、心がワクワクするだろうか。心を自由にしたい時、子どもの心を思い出したい時、読んでみると良いかもしれない。

伊萬里焼の小品を楽しむ—小皿・小鉢・茶碗—



江戸時代の初頭、現在の佐賀県有田町を中心とする地域で、日本で初めてとなる「磁器」が焼成されました。有田焼と呼ばれたこの磁器は、朝鮮から渡来した陶工・李参平(りさんぺい)の創始とされ、有田の泉山(いずみやま)で大量の白磁鉱が発見されたのを機に誕生したと伝えられています。それまで日本の焼き物と言えば「陶器」や「焼締(やきしめ)」が主流でしたが、透きとおるような白さをもった「磁器」の登場は多くの人々を魅了し、瞬間にその存在を全国に知らしめたそうです。当時、有田焼は有田町からほど近い伊萬里港から出荷されていたため、「伊萬里焼」と呼ばれるようになりました。また、よく耳にする「古伊萬里」とは、主に江戸時代に作られた有田焼の呼び名で、「初期伊萬里」「柿右衛門様式」「金襷手(きんらんで)」「鍋島様式」など多彩な様式をもち、中でも金彩や赤を用いた華やかな装飾が特徴の金襷手は「古伊萬里様式」とも呼ばれ、ヨーロッパで大変な人気を博したそうです。

ただいま栗田美術館では、「伊萬里焼の小品を楽しむ—小皿・小鉢・茶碗—」と題して、染付や色絵の技術が華やかに施された伊萬里焼の小さな器たち約50品を展示しています。手のひらに収まるように作られた茶碗類や、取り皿、醤油皿など用途によって様々な呼び名をもつ小ぶりのお皿たち、そして向付(むこうづけ)とも呼ばれる小さな鉢など、一人一つのお膳で食事をしていた江戸時代の人々にとって、これらの小さな器は非常に重要なアイテムだったそうです(現在の私たちにとっても日々の食卓に欠かせない存在ですね)。江戸時代の食卓を彩った有田焼の作品の数々を、皆さんもご覧になってみませんか? 繊細な色使いや筆使いに惹きつけられ、日本の技術の高さに感動することでしょう。近隣にはあしかがフラワーパークもあります。四季折々の花々を楽しみながら、足利の街を散策してみませんか。



写真(上): 展覧会チラシ 写真(下): 色絵牡丹龍文扇形小皿 18世紀前期 写真提供: 栗田美術館(画像の転載ならびにコピー禁止) 展覧会場: 栗田美術館(〒329-4217 栃木県足利市駒場町1542番地) 会期: 2022年3月19日(土)~8月28日(日) 開館時間: 10:00~16:30(入館は16:00まで) ※当面の間、時間短縮で開館いたします。休館日: 月曜日(祝日の場合は翌日) 入館料: 一般1,250円 / 小・中・高校生500円 栗田美術館HP: <http://www.kurita.or.jp/> ※休館日や開館時間は変更する場合があります。最新の状況は栗田美術館HPをご覧ください。※新型コロナウイルス感染症予防のための対応を行っております。ご理解ご協力をお願いいたします。あしかがフラワーパークHP: <https://www.ashikaga.co.jp/>

◇ 花菖蒲(ハナショウブ) ◇



@2022 Kaori Nagatsuka

梅雨空のもと、雨に濡れて艶やかに咲く花菖蒲。その姿はとても涼しげで、しばし暑さを忘れさせてくれます。日本国内に自生するノハナショウブから改良され、江戸時代には数多くの品種が生み出されました。花色の変化に富む花菖蒲は「色彩の魔術師」とも呼ばれ、長雨で鬱々とした季節にひととき華やかに咲き誇ります。花言葉は優しい心。たおやかに瑞々しい花姿に心が癒されます。

◆ 図書館からのお知らせ ◆

2022年5月より新型コロナウイルス感染症拡大防止にともなう図書館サービスが一部変更になりました。①開館時間…月~金 9:00~20:00(土日祝は休館) ②貸出…5冊2週間 ③DVD視聴…予約不要(学生証をお持ちの上、図書カウンターへお申し出ください) ④郵送サービス…返却のみ可(詳細はOPAC参照) ⑤座席利用…図書館内1階で指定された場所のみ可 ⑥滞在時間…制限なし ⑦返却本の除菌…1日間 ⑧ラーニングcommons…通常どおりお使いいただけます(ご使用の際はラーニングcommons入口付近に設置してあります「使用簿」をご記入の上、ご利用ください)。なお、図書館利用は引き続き、学生・教職員のみとさせていただきます。何卒ご了承くださいませよう、よろしく願い申し上げます。

